

A Half Century of Yamaha Motorcycle racing

# Moto Column

Vol. 1

1955 R R 第3回富士登山レース  
すべてはここから始まった

## “富士登山” “制覇”



Road Racing  
World Championship  
Grand Prix  
50th ANNIVERSARY



## 1955 RR 第3回富士登山レース

# すべてはここから始まった “富士登山”制覇

ヤマハ（当時・日本楽器製造株式会社）がモーターサイクルの第一号機YA-1を国内市場に投入した1955年は、戦後林立した多数の二輪メーカーによる販売競争がもっとも激しかった時代。YA-1は他社製品と比べて非常に高価なうえ、「楽器屋のポンポン（バイク）はドレミファとでも鳴るのか」と揶揄され、売れ行きは芳しくなかった。

そんな状況を知った川上源一社長（当時）は、YA-1の優れた性能と品質を証明すべく、富士登山オートレース全国大会への参加を決断する。1953年に始まったこのレースは、当初、観光客の誘致を目的としたイベントだったが、第2回大会では、販売店へのアピール効果に目をつけたメーカー各社の参加が急増。一気に日本を代表するレースとなっていた。

川上社長が参戦を命じたのは、1955年7月10日の第3回大会。だが、開催日までに残された時間は1ヵ月半。その間にYA-1を優勝できるマシンに仕上げなければなら

ない。静岡県浜名工場で、社運を賭けた戦いが始まった。



当初、観光客誘致のためのバイク運動会的なイベントとして始まった富士登山レースは、宣伝効果に注目した二輪メーカーなどの参入で本格的なレースに発展したが、公道レースの危険性を指摘され第4回で幕を閉じた

とはいえ、マシンは市販状態のものに限られており、ほとんど手が出せない。残されたわずかな余地、可能性を求めて手探りの開発である。改造せずにエンジン出力を上げる方法……。考えあぐねたスタッフは、ある時「燃料の質を上げたらどうだ？」と思いつき、航空機用ハイオクガソリンを試してみた。すでに日が沈み、薄暗い中で走行実験を続けていると、誰かが叫んだ。



「おい見ろ、赤く光ってないか？」

その光は紛れもなく、YA-1のエンジンから発していた。点火プラグの熱価が低かったため、シリンダーヘッド周辺が真っ赤に焼けていたのだ。そんなことの繰り返し。失敗は山と募り、時間ばかりが過ぎていく。「いったどうすればいいんだ…」。口をついて出る言葉は、自分たちの無力さを煽るだけだった。

ところが、奇しくもヤマハ発動機が創立した7月1日、開発スタッフに思い掛けない幸運が舞い込んできた。この日届いたDKW社製RT125の新型マフラーをYA-1に装着してテストをしてみると、それだけで0.5馬力パワーが上がったのだ。驚いた技術者たちはすぐにその原因追求に取りかかり、2ストロークエンジンの性能がマフラー

形状によって左右される（カデナシー効果）ことを初めて知った。

ようやく見つけた突破口。この日からレースまでの一週間、技術者たちはこれまでに費やした時間を取り戻すかのように、寝る間も惜しんで純正マフラーの改良に全力を注いだ。

一方、レースで勝つためには優秀なライダーの育成も必要である。とはいえ、日本楽器の社内にそんな人材がいるはずもない。そこで6月半ば、東京の二輪販売店に相談して10人のライダーを集め、そのまま静岡県富士宮市内で合宿を開始した。レースのスタート地点・浅間神社前からゴールの富士山表口2合目まで、来る日も来る日も、登山道を繰り返し走り続けるハードトレーニングである。



2台1組ずつ30秒間隔でスタートするタイムトライアル方式のレースに備え、ヤマハは練習の時からスタート、1合目、ゴール（2合目）の3箇所に無線要員を配置してタイムを測り、チーム戦略に役立てた



そのライダーたちを、浜名工場のスタッフも全力でサポートした。毎日レースさながらの走行練習を行うためには、消耗パーツを

工場で使う白い木綿のツナギ服で出場した第3回富士登山レース。革ツナギの存在を知らなかったせいだが、かえって鮮烈印象を残した



絶えず補給する必要があったからだ。こうして、限られた時間のなかでともに戦うライダーと開発スタッフは、勝利という目標に向かって結束を固めていった。

そして大会当日、YA-1に乗る岡田輝男が、タイムトライアル方式のレースで29分07秒を記録して125ccクラス優勝。さらに3位、4位、6位、8位、9位までYA-1が独占し、その優秀さを全国に知らしめた。

これをきっかけに、ヤマハは数々のレースに挑戦。モーターサイクルメーカーとしての基盤を確立していく。

NEXT ISSUE

1958 RR 8th Catalina GP

世界へのトビラを開け!  
初めての海外レース

